

一橋日本史予想論述チェック表【近世 文化史】

【問題】	【POINT】
桃山文化の特色とその背景を説明せよ	<ul style="list-style-type: none"> ● 武士や豪商を中心として新鮮味あふれる豪華・壮大な文化 ● 寺院勢力が信長や秀吉によって弱められたため、仏教色が薄れ、現世的で力感ある絵画や彫刻などが多く制作 ● 南蛮貿易によるヨーロッパ文化との接触と受容により文化の多様化 ● 富と権力の集中した統一政権の下に各地の経済・文化が交流
中世の城と桃山文化期の城を比較しろ	<ul style="list-style-type: none"> ● 中世の山城は山の斜面を利用して土塁と空堀をつくり、戦時の防塞としての役割を果たしていた ● 桃山文化期の城は領国支配の利便をも考慮して、小高い丘の上に築く平山城や平地につくる平城となり、軍事施設としての機能とともに城主の居館・政庁としての機能をも合わせもつ。重層の天守(天守閣)をもつ本丸と、土塁や水浴で囲まれ、いくつかの石垣で築かれた郭がある。安土城や大坂城・伏見城などは、全国統一の勢威を示す雄大・華麗なもの <p>※書院造、金箔地に青、緑を彩色する濃絵の豪華な障壁画、欄間彫刻</p>
狩野永徳が大成した装飾画の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ● 室町時代に盛んになった水墨画と日本古来の大和絵とを融合させて、豊かな色彩と力強い線描、雄大な構図をもつ <p>※『唐獅子図屏風』『檜図屏風』など</p>
桃山文化における狩野派以外の絵画作品を説明	<ul style="list-style-type: none"> ● 海北友松の『山水図屏風』『牡丹図梅花図屏風』、長谷川等伯の『松林図屏風』など
蒔絵とは何か	<ul style="list-style-type: none"> ● 器物の表面に漆で文様を描き、金・銀などの金属粉や色粉を蒔きつけて付着させる、日本独自の漆工芸 <p>※高台寺蒔絵</p>
慶長勅版を簡潔に説明せよ	<ul style="list-style-type: none"> ● 後陽成天皇の勅命で、朝鮮伝来の印刷法と木製の活字により開版(出版)された四書や『日本書紀』などの一連の書物で、日本最初の木版活字本 ● 朝鮮侵略の際に朝鮮から伝えられた活字印刷術を使用
侘び茶の性格を説明せよ	<ul style="list-style-type: none"> ● 道具や調度の豪華を排して、簡素静寂な境地を重んじた ● 村田珠光 → 武野紹鷗 → 千利休 <p>※妙喜庵待庵</p>
秀吉の北野大茶湯を簡潔に説明	<ul style="list-style-type: none"> ● 千利休・今井宗久・津田宗及らの茶人を中心に、貧富・身分の別なく民衆も参加させた <p>※黄金の茶室</p>
桃山文化期の人々の衣服や見た目の変化	<ul style="list-style-type: none"> ● 小袖が一般に用いられ、各階層によって模様や色彩に変化をつけたさまざまな服装が生まれた。 男性は袴をつけることが多く、簡単な礼服としては室町時代以来の素襖に加え、肩衣・袴(袴)を多用 ● 女性の場合、武家の女性の間では打掛・腰巻などが殿中での表着として用いられたが、庶民の間では小袖の着流しがふつうになり、着物が成立 ● 男女ともに結髪するようになり、男性では頭上を広くそりあげる月代の風習が武士を中心に広まり、のち庶民にも普及
桃山文化のその他	<ul style="list-style-type: none"> ● 阿国歌舞伎、女歌舞伎、囲碁棋士の本因坊算砂や将棋棋士の大橋宗桂、高三隆達が小歌に節づけをした隆達節、盆踊り、

灰吹法の内容とそれを朝鮮から伝来させた人物	●神屋寿禎●金や銀の含有量の高い鉛合金から金や銀を得る方法の一つ。
寛永期の文化の特徴	●桃山文化を受け継ぎつつ、前時代の 下剋上の終期 となり 幕藩体制が安定 する中で成立した、京都の天皇家や江戸の武家など上流階級を中心とする文化
寛永期の文化の代表的建築	●3代将軍家光による豪華な装飾彫刻をほどこした 権現造の日光東照宮 (徳川家康を東照大権現として、幕府安泰を加護する神としてまつるにふさわしい 豊廟の必要性)●八条宮智仁親王の別邸であり、書院造に茶室の草庵風も合わせた数寄屋造と廻遊式庭園から成り、簡素で気品のある 桂離宮 ●後水尾上皇が自らの洗練された計画をもとに完成させた 修学院離宮
寛永期の文化のその他	●上層文化人のサロンの集い、 俵屋宗達 、 本阿弥光悦 、茶道・造園に秀でた 小堀遠州 や生花の 池坊 、 藤原惺窩 は選俗して朱子学の啓蒙、 林羅山 は家康に用いられた、
朝鮮系の製陶を4つあげよ	●有田焼・唐津焼・萩焼・薩摩焼
酒井田柿右衛門の功績を説明せよ	●上絵付の技法で 赤絵 を完成させた
本阿弥光悦の功績を説明せよ	●鷹方峰に芸術家を集めて芸術村をつくり、 蒔絵 ・陶芸(楽焼)・書道・古典に通じた
17世紀後半に 歴史書の編纂が盛んになった理由	●幕藩体制が安定し、 儒学に基づいて忠孝や礼儀による秩序を重視する文治政治 ●過去の政権の盛衰を示して武士に為政者としての自覚を求め、徳川家の支配の正当性を示そうとする風潮
朱子学を説明	●合理的思考と道徳主義を合わせ持ち、社会秩序を宇宙や自然と同じように定まったものとみる儒学の一派
朱子学が幕府や藩に受容された理由	●君臣・父子の別をわきまえ、上下の秩序を重んじる学問であったため
閑院宮家を創設した理由	●当時、朱子学的にも皇室の存続を重視していたが、宮家は 伏見・桂・有栖川 の3家しかなく、天皇の子弟の多くが出家して門跡寺院に入室している状態を少しでも改善しようとして、世襲親王家を増やそうとした
吉川神道の提唱者と内容を説明せよ	●吉川惟足●吉田神道を継承した道徳的な神道、天皇家を中心とする君臣関係を強調し、従来の神仏習合的神道を排して 儒教的な考え方を付加 ●上級武士層に重んじられ、幕藩体制成立期の一つの精神的支柱、山崎闇斎の垂加神道の成立の基盤
日本で最初に鉄鉱石の採掘を行った鉱山名	●釜石鉄山 ※ 大島高任 が1857年にそこに洋式高炉を建設した
木綿の人々への影響力	●麻織物に代わって綿織物が庶民の日常衣料として普及● 吸湿性・保温性 に優れていたので夏でも冬でも快適な衣服であり、野山での作業に適していた。 丈夫さ を持ち合わせ、 染色の容易さ により衣服の多様化も促進●干鰯や油粕など即効性にとむ 金肥 を多量に投与することが必要だったため商品作物的な特徴があったことから農民の階層分化も助長●栽培から紡績・織布などにいたる全ての生産工程においての 分業の必要性 から、社会的な分業関係の浸透に貢献、商品流通促進も
百姓と農民の違い	●百姓…村の構成員として年貢・諸役を負担する人々に対する制度的な呼称で、 農業だけでなく漁業・林業などにも従事 ●農民…従事する生業に即した呼称

<p>近江商人の説明と、彼らの哲学を説明せよ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●特に江戸時代に、行商、出店で全国に進出した近江国出身の商人で、朱印船貿易や大名貸や醸造業を営む者や、蝦夷地で場所請負人となる者もいた●「売り手よし、買い手よし、世間よし」(売り手の都合だけでなく、買い手の満足や、商いを通じて地域社会の発展や福利の増進に貢献すべき)の「三方よし」の思想 ※日本三大商人…大坂商人、伊勢商人、近江商人
<p>17世紀末に使用されていた暦の名前と、作成に関与した人物</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●貞享暦●渋川春海
<p>上記の改暦の背景について説明</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●平安中期以来の宣明暦は誤差が大きくなっていったため、元の授時暦をもとに修正 ※貞享暦→宝暦暦→寛政暦→天保暦→太陽暦
<p>元禄文化の背景</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●東アジアにおける清の樹立がもたらす平和と、幕政の安定と経済の目覚ましい発展の下で社会が成熟●、武士や有力町人のみならず、下層町人や地方の百姓に至る庶民にまで多彩な文化が受容
<p>元禄文化の特徴</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●鎖国状態の確立により外国の影響が少なくなり、日本独自の文化が成熟●政治的な平和と安定の中で、儒学のみならず天文・医学・本草学などの科学的な分野を含む学問が重視 ●多様な文学を享受する広範な人々の存在と、これを媒介する紙の生産や出版業が発展
<p>元禄文化の内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●庭園…後楽園(岡山)・後楽園(水戸藩邸)・六義園など ●絵画…土佐光起「春秋課長図屏風」、住吉如慶「東照宮縁起絵巻」、住吉具慶「洛中洛外図巻」、尾形光琳「紅白梅図屏風」「燕子花図屏風」、菱川師宣「見返り美人図」など ●思想…朱子学の全盛期、南学、垂加神道、陽明学 ●文学…仮名草子→浅井了意『東海道名所記』、 浮世草子→井原西鶴『好色一代男』『好色五人女』(好色物) 『武家義理物語』『武道伝来記』(武家物) 『日本永代蔵』『世間胸算用』(町人物) ●俳諧…貞門派の松永貞徳『御傘』(古風、俳諧の規則を定める) 談林派は西山宗因『西翁十百韻』(新風、自由・軽快) 蕉風は松尾芭蕉『俳諧七部集』(冬の日・春の日など) 俳文は松尾芭蕉『野ざらし紀行』『笈の小文』『奥の細道』 ●脚本…浄瑠璃は近松門左衛門『曾根崎心中』『心中天網島』『冥途の飛脚』(世話物) 『国性爺合戦』(時代物) ●古典…契沖『万葉代匠記』、北村季吟『源氏物語湖月抄』、林羅山・林鶯峰『本朝通鑑』や水戸の徳川光圀が始めた『大日本史』、新井白石『読史余論』 ●自然科学…貝原益軒『大和本草』、稲生若水『庶物類纂』、宮崎安貞『農業全書』、 吉田光由『塵劫記』、関孝和「発微算法」(和算の水準を飛躍的に高めた)。渋川春海は自ら計測した貞享暦をつくり、平安時代から用いられてきた宣明暦にかわって幕府に採用 ●国文学…下河辺長流や戸田茂睡(制の詞などを排斥し、自由な言葉使いを求めて

	<p>歌学の刷新)、契沖『万葉代匠記』、北村季吟『源氏物語湖月抄』、『枕草子』の注釈書の『春曙抄』</p>
17世紀後半から18世紀初期の、朱子学に対する批判	<p>●朱子学や陽明学を排し、孔子や孟子の原典に直接立ち戻って研究することを主張し、当時の政治・社会の現状に適合した儒学をめざす古学派が出現●山鹿素行は朱子学を批判して『聖教要録』を著し、伊藤仁斎は政治から離れて個人の倫理を突き詰め、荻生徂徠は道徳から離れて政治・社会の統治法を追究</p>
山鹿素行の活動	<p>●儒学の立場から士道の確立に努め、実用の学を提唱して朱子学を批判し、自らの考えを聖学と呼んだ。そのため、赤穂へ配流</p>
垂加神道の提唱者、性格とその影響	<p>●山崎闇斎●日本生まれの吉田神道(唯一神道)と中国生まれの儒教である朱子学を結合して道徳性が強い。その国粋主義的性格は、後の尊王運動に影響を与えた。</p>
主な農書を5つ挙げよ	<p>●「清良記」、「会津農書」、「耕稼春秋」、「老農夜話」、「農業全書」</p>
和算の衰退を説明せよ	<p>●流派による秘伝化と、算額に見られるような技巧化・趣味化のため、和算は実用から離れ垂離。明治の近代学校で洋算が採用されると、そろばんを除いて和算は急速に廃れた</p>
貞門派の特徴を簡潔に	<p>●松永貞徳は、俳諧が和歌・連歌を詠むにあたっての基礎であると考え、俗語や漢語などのいわゆる俳言を使うことを主唱</p>
談林派の特徴と衰退	<p>●貞門に次いで現れ、西山宗因が盟主。貞門の保守的傾向の行きづまりを打破するため、字余り、奇抜な趣向などに走った。やがて漢詩文調の新風におされ、談林派から抜け出した芭蕉が蕉風を確立すると衰退</p>
元禄期の歴史学の特徴	<p>●確実な史料に基づいて歴史を叙述する実証的な姿勢</p>
元禄期の本草学の特徴	<p>●植物・動物・鉱物の薬用効果について研究する本草学はしだいに博物学的色彩を帯び出した</p>
心学の開祖と内容	<p>●石田梅岩●儒・仏・神・道教の説を入れ、営利・商売の正当性と商人の存在意義を主張し、儉約・正直などの町人道徳を説いた</p>
18世紀後半の学問発達の特徴	<p>●朱子学の実証的・合理的研究の蓄積によって、広く資料を収集し、具体的な証拠に基づいて研究しようとする方法が共通●薬草を中心に動物・植物・鉱物などの薬効を研究したものである本草学では殖産興業政策とも結びついて、博物学として発展●医学や地理学の分野ではオランダ語を介して西洋の科学的な研究方法が導入●日本の古代精神探求のために古典の考証的研究を進める国学も発展</p>
和学講談所とは、その設立者と彼の代表的著作	<p>●塙保己一●「群書類従」●幕府の許可で設け、林家の監督の下に国史講習と史料編纂に従事</p>
南学とは	<p>●土佐に起こったとされる朱子学一派で、谷時中が儒学を仏教から分離して確立し、現実の政治と結びつく実践的な儒学を形成</p>
野中兼山の功績	<p>●土佐藩の家老で、新田開発・殖産興業などの藩政改革を推進</p>
本居宣長の功績	<p>●『古事記』などの研究を通じて、儒学・仏教が伝来する以前の日本精神を探究し、国学を大成</p>
野々村仁清の功績	<p>●上絵付法をもとに色絵を完成させて京焼の祖となった</p>

契沖の功績	●「万葉集」を研究し、多くの事例によって戸田茂睡の説の正しさを説明し、和歌を道徳的に解釈しようとする従来の説を批判して「万葉代匠記」を著した
丸変五変論の説明	●新井白石は、政治権力を掌握主体で時代区分●公家政治から武家政治への転換という流れを示す。●政治権力が天皇や外戚⇒院⇒武家⇒鎌倉幕府成立から南北朝期に至る公武並立の時代⇒南北朝滅亡による武家の権威・権力の一体化した政治が復活●徳川政権の正当性を歴史的に論証
古医方とは	●名古屋玄医の医説●元・明代の学風を退け、実験を重んじて漢代の医方への復古を説いた
寛政の三奇人を説明せよ	●海防の緊要性を説き『海国兵談』を著した林子平●勤王を提唱し諸国を遊説した高山彦九郎●歴代天皇陵の荒廃を嘆き『山陵志』を編纂した蒲生君平
三浦梅園の功績	●儒教と洋学の知識を合わせた自然哲学である条理学を提唱
浮世草子と仮名草子の違い	●浮世草子は享樂的現世、特に好色生活を写した風俗小説●仮名草子は、現世否定的で教訓を主とする
古文辞学の提唱者と内容	●荻生徂徠●古義学に対抗し、中国語自体が歴史的に変化していることを踏まえ、古典を成立当時の意味で解釈しようとし、治国・礼楽の制を整えようとした
伊藤仁斎の功績	●朱子らの注釈は孔孟の古義にそむくとしてしりぞけ、直接原典《論語》《孟子》について聖人の道を求めよと主張し、古義学を唱えた
江戸三大火事	●文化3年の大火・明暦の大火・明和の大火
桂川甫周の功績	●幕府の奥医師で、「解体新書」の訳述に参加●「魯西亜誌」を著し、漂流後にロシアより帰国した大黒屋光太夫の供述をもとに、「北槎聞略」を著してロシアの風俗・言語などを編述
寺西封元の功績	●天明の飢饉後、子育て支援の小児養育料の支給など人口増加策を行った
宝暦・天明期の文化の背景	●商品経済の発展により裕福になった百姓や町人たち、都市生活者となった武家の中から、学問や思想、芸術など、幅広い分野で文化の担い手が登場●武士から百姓・町人に至るまで、学校を通じた教育が盛んとなり、民衆の識字率も高まって読書をする人々が全国に広がり、書籍や印刷物が多様に制作・出版され、人と物の移動の活発化とともに様々な知識や情報が全国的に流通●幕藩体制社会の矛盾が深まると共に、現実を直視して幕府と藩の政治のありかたを批判するような思想も生まれた
折衷学派と考証学派を説明せよ	●折衷学派…古学派やいずれの学派にも与せず、先行の諸学説を選択・折衷して正しい解釈にいたろうとする ●考証学派…儒学の古典を確実な典拠に基づいて実証的・客観的に解釈しようとする
宝暦・天明期の文化の具体例	●初等教育が普及し、識字率が上昇●藩校、閑谷学校などの郷学、私塾、懐徳堂⇒富永仲基『出定後語』、山片蟠桃『夢の代』、寺子屋 ●石田梅岩『都鄙問答』 ●文学…江戸の風俗をうがち諷刺した黄表紙、江戸の遊里の生活を描いた洒落本、 山東京伝『仕懸文庫』『江戸生艶氣棒焼』、大田南畝・石川雅望らの狂歌 ●演劇…人形浄瑠璃⇒竹田出雲(2世)『仮名手本忠臣蔵』『菅原伝授手習鑑』『義経千本桜』、 近松半二は『本朝廿四孝』 唄浄瑠璃⇒一中節・常磐津節・新内節・清元節 歌舞伎⇒中村座・市村座・森田座の江戸三座 ●俳諧…蕪村『蕪村七部集』

	<p>● 絵画…喜多川歌麿『婦女人相十品』、東洲斎写楽の大首絵の手法、</p> <p>文人画⇒池大雅と蕪村の合作『十便十宜図』</p> <p>円山応挙「雪松図屏風」「保津川図屏風」</p> <p>西洋画⇒平賀源内、司馬江漢『不忍池図』、亜欧堂田善『浅間山図屏風』、小田野直武</p> <p>● 蘭学…山脇東洋の日本最初の解剖図録『蔵志』、前野良沢・杉田玄白(「蘭学事始」・「後見草」)が『解体新書』を出版、大槻玄沢『蘭学階梯』、宇田川玄随『西説内科撰要』、稲村三伯のわが国最初の蘭日辞書『ハルマ和解』、</p> <p>● 国学…荷田春満『創学校啓』、賀茂真淵『国意考』『万葉考』、本居宣長、埴保己一『群書類従』、伴信友の、大友皇子に関して記述した「長等の山風」</p>
円山派の特徴を説明せよ	● 客観的な写生を重んじ、洋画の遠近法を取り入れて、日本的な写生画の様式をつくりあげた
司馬江漢の功績	● ヨーロッパの技法を学んで銅版画を作成、地動説を日本に紹介
江戸後期の浄瑠璃の変化	● 人形浄瑠璃が歌舞伎に圧倒され、浄瑠璃は人形操りから離れて、一中節・常磐津節・新内節・清元節などの座敷で唄われる唄浄瑠璃の方面に移った。
平賀源内の功績	● 本草学・蘭学・物産学・国学を学び、物産会を開催 ● 火洗布・エシキテル・寒暖計などを発明 ● 戯作や「神靈矢口渡」など浄瑠璃にも才能を発揮し、洋画にも優れ、「西洋婦人図」を描く
長久保赤水の功績	● 日本最初の経緯度をいれた地図「改正日本輿地路程全図」を刊行
近世後期(化政期)の民間信仰	● 民衆は娯楽的性格を強めつつも、現世利益を求めて各地の寺社を訪れた ● 近隣の寺社の縁日や開帳、遠方の寺社へ講を結んで交代で参詣 ● 霊場への巡礼
中世と近世の巡礼の違い	● 中世では浄土信仰を背景に、熊野詣などの信仰心に基づいた巡礼 ● 近世では大衆的・娯楽的性格が強い
化政文化の背景を説明せよ	● 全国的な流通の活発化は交通の発展を伴い、人と物の全国的な交流を生み出した ● 商人が形成した全国の商品流通網は都市と地方を文化の面でも結び付け、学者・文人の全国的な交流、教育の普及、出版の発展、神仏信仰に基づく寺社参詣の流行により、中央の文化は全国各地に伝えられた ● 大御所時代での品位を落とした文政小判の大量鑄造も経済活動を活発化させた ● 錦絵の風景画や名所図会で紹介されることにより人々の旅への関心が高まった
江戸において文化・文政期に出版が盛んになった理由	● 江戸地廻り経済圏の発達に伴い、江戸の人口の多くを占める中下層の庶民の生活も安定し、手習い塾が普及して識字率が向上 ● 幕府の風俗取り締まりが緩んだため、物見遊山など娯楽が盛ん ● 木版印刷技術や貸本屋の発達に支えられ、絵草紙や名所図会など庶民的な出版物が盛んに流通 ※ 「江戸名所図会」→ 斎藤幸雄が編集に着手、その子幸孝、孫齋藤月岑を経て完成
化政文化の内容を具体的に性格	● 鶴屋南北『東海道四谷怪談』、河竹黙阿弥『白浪五人男』 ● 民族・地理 ⇒ 鈴木牧之『北越雪譜』、菅江真澄『菅江真澄遊覧記』 ● 呉春の四条派、小林一茶『おらが春』、柄井川柳『誹風柳多留』 ● 滑稽本 ⇒ 式亭三馬『浮世風呂』『浮世床』、十返舎一九『東海道中膝栗毛』 人情本 ⇒ 為永春水『春色梅児誉美』

	<p>合巻⇒柳亭種彦『修紫田舎源氏』</p> <p>読本⇒上田秋成『雨月物語』、曲亭馬琴『南総里見八犬伝』『椿説弓張月』</p> <ul style="list-style-type: none"> ●錦絵の風景版画⇒葛飾北斎『富嶽三十六景』、歌川広重『東海道五十三次』 ●和歌⇒香川景樹らの桂園派、良寛 ●天文学⇒高橋至時の寛政暦、志筑忠雄『暦象新書』、伊能忠敬『大日本沿海輿地全図』 ●科学技術⇒『厚生新編』、宇田川榕菴『舎密開宗』 ●その他…シーボルトの鳴滝塾、緒方洪庵の適塾、咸宜園、松下村塾、海保青陵『稽古談』、本多利明『西域物語』『経世秘策』、佐藤信淵『農政本論』『経済要録』、藤田幽谷、会沢安『新論』、藤田東湖『弘道館記述義』、平田篤胤の復古神道、 <p>※瓦版(庶民の情報伝達的手段として災害・世相などの項目が載せられ、天保の改革以降に大量出版)</p> <p>※湯治(病氣治療のため温泉に赴くこと)</p> <p>※芝居小屋・見世物小屋・寄席</p> <p>※連(和歌などを嗜むために熟練した師である宗匠を中心に組織された文化的結社)</p>
主な私塾を説明せよ	<ul style="list-style-type: none"> ●咸宜園(豊後日田)(広瀬淡窓)、古義堂(京都堀川)(伊藤仁斎)、国学の鈴屋塾(伊勢松坂)(本居宣長)、洋学の適塾(大坂)(緒方洪庵)、鳴滝塾(長崎)(シーボルト)、慶応義塾(福沢諭吉)、松下村塾(吉田松陰)、藪園塾(江戸)(荻生徂徠)、芝蘭堂(江戸)(大槻玄沢)、心学舎(京都)(石田梅岩)など
江戸時代における歌舞伎の変遷	<ul style="list-style-type: none"> ●出雲阿国のかぶき踊りをもとにした女歌舞伎、美少年の若衆歌舞伎の禁止を経て、成年男子のみの野郎歌舞伎となり、江戸で勇壮な演技である荒事に市川団十郎が、上方で恋愛劇である和事に坂田藤十郎が、女性を演じる女形に芳沢あやめが現れた
読本を簡潔に説明	<ul style="list-style-type: none"> ●仮名草子の流れを引き、勧善懲悪・因果応報の趣旨で書かれた歴史的伝奇小説。
合巻を簡潔に説明	<ul style="list-style-type: none"> ●黄表紙の数冊分を綴じ合わせたもの。
桂園派とは何か説明せよ	<ul style="list-style-type: none"> ●香川景樹及びその門下の歌人の一派で、「古今集」の優雅で平明な調べを基調とする古今調を理想 ●一般庶民にはあまり浸透しなかった
良寛の歌風を説明せよ	<ul style="list-style-type: none"> ●万葉調の童心あふれた独特の歌風
狂歌を簡潔に説明せよ	<ul style="list-style-type: none"> ●和歌に言葉のもじりなどの滑稽味を取り入れた短歌。
文人画＝南画を簡潔に説明せよ	<ul style="list-style-type: none"> ●文人・学者が余技として描いた絵で、水墨淡彩で枯淡清純な気品を重んじた。
講談を簡潔に説明せよ	<ul style="list-style-type: none"> ●寄席演芸の一種。軍書講談・実録などを、抑揚をつけて口演
宮地芝居を簡潔に説明せよ	<ul style="list-style-type: none"> ●寺社の境内や門前に小屋掛けする小芝居であり、江戸三座のような恒常的な大芝居とは違い、寺社奉行が統轄した。天保の改革で統制を受けた。
開帳の意味の変遷	<ul style="list-style-type: none"> ●本来は仏法と縁を結ぶ目的であったが、江戸後期に隆盛し、開帳詣など物見遊山になった
四条派を始めた人物と内容	<ul style="list-style-type: none"> ●呉春●文人画と円山派の長所を取り入れて始めた四条派は、温雅な筆致で風景を描き、幕末の上方豪商に歓迎された
高島秋帆の功績	<ul style="list-style-type: none"> ●近代的西洋流砲術の先駆者で進取的精神の持主であった。江川太郎左衛門(韮山に反射炉を築造)に砲術を伝え、その後幕府に招かれて、江戸郊外の徳丸が原で練兵を行った
寺子屋の教育について、藩校と対比	<ul style="list-style-type: none"> ●藩校…諸藩が民政を担う人材を育成するために設立した教育機関で、武士を対象とし、授業は朱子

	<p>学など漢学が中心●寺子屋…村役人や僧侶・神職などによって経営された教育機関で、庶民の子女を対象とし、授業では儒学教育も行われたが、読み・書き・そろばんが中心</p>
江戸時代後期の蘭学の展開と幕府の対応	<p>●医学などの実学として蘭学が広まると、幕府は蛮書和解御用などで蘭学を保護したが、一方で蛮社の獄など幕政の批判につながると抑圧</p>
江戸時代後期における専門市の特徴や役割	<p>●問屋・仲買と小売商人との売買の場である卸売市場でもあり、都市と農村を結ぶ経済の中心としての役割</p>
水戸学の前期と後期	<p>●前期は徳川光圀の下に、朱子学の大義名分論に基づき尊王論を展開●後期は徳川斉昭を中心に、天皇を尊び、覇者を排斥する尊王斥覇の理論から攘夷論を展開</p>
江戸における小説本の一般的な流布の仕方	<p>●版元が作者から作品を買上げて出版し、主に貸本屋(当時、草子類が高価であったために人気があった)を利用する形で庶民の間に流行</p>
復古神道とは	<p>●儒物に影響されない純粋な古道を明らかにし、神意のままに行う「惟神の道」の復活を説く。尊王論とつながり明治維新の指導理念の1つに</p>
草莽とは	<p>●体制の解体や対外的な侵略の危機意識によって政治に参加した、浪人・郷土・豪商・豪農ら幕末の民間の運動家で、武士身分に属さない臣のこと</p>
報徳仕法の具体的内容と、その提唱者	<p>●二宮尊徳●財力に見合った合理的な生活設計をする分度と今あるものを将来あるいは他者へ譲り渡す推譲、勤儉貯蓄などによって、農村の困窮を救い、農民に安全な生活を営ませることがめざされた。</p>
大原幽学の功績	<p>●神道・仏教・儒教を学び、下総国香取郡長郡村で村民を指導して村の建て直しを図り、道徳と経済の調和に基づく性学を説いた</p>
富永仲基の主張	<p>●儒教・仏教・神道を歴史的立場から否定し、人の当たり前を基本とする「誠の道」を提唱</p>
武士土着論の主張者と内容	<p>●熊沢蕃山●都市に住む武士たちがそれぞれの所領に戻り、自らも生産者として暮らすべきだとして、従来の半農半武士の時代に戻し、俸禄の負担を軽減させ、さらに都市での商業活動の活発化による物価高騰を抑制しようとした。</p>
農兵隊とは	<p>●幕末に組織された農民の兵隊で、代官江川家の支配地において、村方の治安を維持</p>
御蔭参りが起こった背景	<p>●上位の階層に従っていた子・妻・奉公人などが、商品経済の発展に伴う社会の動揺の中で、日常の様々な束縛や規制からの解放を願い、宗教的な形態をもちながら富裕者に施しを求めながら参加●多くは親や主人の許可を得ず、旅行手形も用意せずに家を出た抜参り</p>
庚申講とは	<p>●招福除災のため、庚申の夜に集會し、眠らずにいる庚申待の行事を行う民間信仰の組織</p>
遊び日を説明せよ	<p>●農村において、正月・節句・祭りなどの年中行事や特別の日に設けられた遊休日。</p>
開港後の洋学の摂取組織と関与した人物 2 人	<p>●開成所●西周(実証主義・功利主義の影響を受けながら西洋哲学を紹介し、哲学・理性など多くの西洋哲学用語の日本語訳を考案した。「百一新論」「百学連関」の序論)・「百学連環」、津田真道(日本初の西洋法学書である「泰西国法論」を翻訳した)⇒ 明治初年には明六社の同人として啓蒙活動</p>
ヘボンの功績	<p>●神奈川で医療と伝道に従事し、和英辞典「和英語林集成」を編集、ヘボン式ローマ字を創始</p>
フルベッキの功績	<p>●明治維新後、政府顧問となり、岩倉使節団の派遣、ドイツ医学の採用などを進言</p>
近世の宗教の多様性を説明せよ	<p>●古代以来の神仏習合のもとで近世の信仰は神仏一体●幕府の禁教政策により、民衆は仏教によって幕</p>

府に統制される●寺社の祭礼・彼岸会・盂蘭盆などの年中行事の浸透、湯治や物見遊山の旅、伊勢神宮・善光寺・金毘羅宮などへの寺社参詣、御蔭参り、西国三十三カ所・四国八十八か所などの聖地や霊場をめぐる巡礼、富士講●神道・修験道・陰陽道も●幕末の黒住教(黒住宗忠)・天理教(中山みき)・金光教(川手文治郎)などの教派神道